

# ひと街にと

No. 45

## 語り継ごう、明日へ。

歴史はいつも未来へのみちしるべです。世の中の進むスピードと自分の生きていくペースが、少し合わなくなってきたなと感じ始めたら、いつか来た道まで戻ってみましょう。



ジュースだったか  
ワインだったか

秋は実りの季節。家の近くにも食べられるものはたくさんあって、採ってきてはおやつや食卓に。人気のあったのはヤマブドウです。あり合わせの瓶に細い棒でつつきながら実を詰め込みます。夜中にポンと蓋が飛んだりしてこれはもうワインに変身した証拠です

が、待ってられない子供たちには濾した原液に砂糖を入れて甘いジュースに。焼酎を加えてしばらく寝かせれば味がまるやかになって、いけるクチのお母さんたちにはちょっとした楽しみでした。熊の出そうな山奥にしか見られなくなったヤマブドウの思い出です。

### 市制移行、人口増加 ——街の発展映して。

ある建築家が、アメリカの地方都市で飛行機に乗るまでに時間があったので、タクシーにまちの名所案内を頼んだところ、運転手は自分の住む地域と子供たちの学校、それに総合病院の3カ所を回ったそうです。まちの自慢が何であるか——機能優先の役所は、その仲間入りができるのでしょうか。

道内各地の市庁舎が老朽化して建て直すのにお金がないという新聞報道がありました。札幌市庁舎も例外ではないようです。現庁舎の完成は昭和46年(1971)。札幌オリンピックの前

年で、人口が100万人を突破した頃でした。

それ以前の庁舎を覚えている人も多いことでしょう。中央区北1条西4丁目、東西の最も車の多い通りにありました。ここが建てられたのは戦前の昭和12年3月。その前となると、同北1



札幌区役所の外観／「札幌市写真帖」(昭和11)から



中央区北1西4にあった旧札幌市役所

### まちのメモリー——札幌市庁舎

条西2丁目西北角にあった旧区役所の建物でした。市制がしかれたのは大正11年(1922)で、それまでは札幌区の時代があったということです。

人口が200万人目の現在、まちの自慢というほどの存在ではないかもしれませんが、住民とのコミュニケーションの場であることには違いありません。





## 時の街角

北海道開拓の村から

●北海道開拓の村 所在地／札幌市厚別区厚別町小野幌五〇―一  
電話〇二二八九八―六九九一

文学ファンにとって興味尽きない作家の足跡  
そこで作品の登場人物も連想されたりすると  
再読への意欲もまた高まるうというものです

# 木田少年が訪ねた リンゴ園の中の家。

## 旧有島家住宅

有島武郎といえはよく知られた日  
本近代文学史上の代表的作家の一人。  
その有島が、明治四十三年（一九一  
〇）五月から翌四十四年七月ころま  
で住んでいたというのが今紹介す  
る建物です。当時の所在地は札幌市  
白石区菊水一条一丁目（札幌郡白石  
村大字上白石村二番地）。一条橋と

ろだった。私の借りた家は（略）堤の  
下の一町歩ほどもある大きなリンゴ  
園の中に建ててあった。そこにある  
日の午後君は尋ねて来たのだった。  
一方、木田金次郎は昭和二十七年  
六月三十日の北海タイムスに寄せた  
『生まれ出る悩み』と私』と題す  
る随筆に、「それから間もなくその

豊平橋の間の豊平  
川沿いです。  
有島が画家の木  
田金次郎をモデル  
に書いた『生まれ  
いずる悩み』の冒  
頭から少し読み進  
むとこんな一節が  
あります。「私が  
君に初めて会った  
のは、私がまだ札  
幌に住んでいたこ



有島と木田少年の出会いの場―豊平川沿いのリンゴ園の中に建っていた住まい  
6畳座敷の天井は網代の純和風だが上げ下げ窓は洋風。2階8畳が有島の書斎

人の住居を偶然？ 豊平川の対岸に  
ある大きなリンゴ園の中に見出し、  
私は少年らしい感傷をこめて眺め  
た」と書いています。それから間  
もなく、とは、北大黒百合会の展覧  
会で有島の画に感銘を受けた日、か  
らです。木田は、自ら写生した豊平  
川の画を抱えて有島宅に足を運び、  
その評価を仰いだのでした。

小説の中で、「十六七の少年」に  
「たいへんいいじゃありませんか」  
と応じた有島が、家族と一年余暮ら  
していたこの家は、一階が六畳二間  
と八畳間に板敷の台所、二階が有島  
の書斎と、間取りは特に特徴はない  
ようです。しかし六畳の座敷の天井  
が網代になっていたり、外壁の西洋  
下見板張り、上げ下げ窓など西洋折  
衷の造り。すでに洋風が一般住宅に  
も広がっていたことがわかります。

一番広い8畳。床の間、戸袋付きの縁側とこちらも純和風  
写真にはないが玄關横の6畳に関係資料が展示されている

## 人のいしぶみ

やさしい歌  
詞、覚えやす  
いメロデー  
その典型  
である童謡を  
作った人のこ  
とを、ほとん  
どの人は知らないで  
しょう。

札幌のススキノに近いと  
ころを歩いていて、「おやつ？」  
と思ったのがこの銅像です。「ど  
んぐりころこ  
ろ」を作曲し  
た梁田貞とい  
う人が、恰幅  
のよい姿で子  
供たちを見守っていました。



楽聖梁田貞先生

（札幌市中央区南四条西七丁目）

## ドンダリたち 見守る作曲家。

『城ヶ島の雨』北原白秋の詩「雨  
が降る降る」で始まる抒情的な歌  
曲は「存じのとおり。梁田自身も  
当初は声楽家を  
目指したとい  
うだけあって、イ  
ンターネット  
で彼がこの歌を熱  
唱する動画を見られます。

明治十八年（一八八五）札幌に生  
まれ、創成小学校、札幌中学（現  
札幌南高）、東京音楽学校（現東京  
芸大）と進んだ作曲家です。梁田  
を何よりも有名にしているのは

創成小も、今は校名が資生館小  
に変わっていますが、元氣一杯の  
どんぐりたち（子供たち）は昔と同  
じ。こんな歌を今でも口ずさんで  
いるかは定かではありませんが。

「楽聖梁田貞先生」像は「どんぐりころころ」の楽譜とともに資生館小の南西角に立つ  
像の後ろに背を伸ばす、スネラの木は秋になるとドングリの実を落とす







# まちの仕事

梅澤刺繍店

小林 罔文さん  
靖政さん

●札幌市中央区南十五条西十丁目三一  
電話〇一(五三)一一一〇一  
www.umezawastyuu.jp



2代目社長の小林罔文さんと後継を託された靖政さん

日頃よく目にする製品でも、作っている現場の様子を知らないことも多いものです。目立たないけれど服飾に欠かせない、刺繍の老舗を訪ねました。

札幌市中央区の行啓通商店街の近くで

終日、ミシンが軽やかに動いている梅澤刺繍店。二代目社長の小林罔文さん(六八)により、まずと創業は昭和二十三年(一九四八)、小林さんの叔父が始めた進駐軍相手の手仕事です。やがて進駐軍が撤退し、ミシン一台による注文のネーム刺繍へ。続いて既製服の時代になり、一台でたくさん縫える機械(多頭機)を導入。奥さんの富子さんも加わっての家族労働で今日に至っています。その機械も七〇年代にはコンピュータ

## 刺繍一筋65年、若き三代目は「もつとワツペン」を。



何点も縫い上がってきます。しかしミシンやパソコンの性能は日進月歩。新しい時代に対応するため急ぎよ後継者指名を受けて、福島県から戻ってきたのが三代目となる三男の靖政さん(三七)です。会社勤めだった靖政さん。奥さんと二人のお子さんを残しての「単身赴任」です



2台の多頭機が休みなく動いている仕事場。奥さんの富子さんは重要な働き手の一人だ。右はこちで作ったワツペンの一部。メールの注文でOK

が、「小さいころから家の仕事は見ているので、抵抗はありません」ときっぱり。札幌へ来て約一年。靖政さんが開設したホームページを通じて、注文が舞い込んできている様子に罔文さんも目を細め、「金銭的なこと以外は、もう大概のことは大丈夫。三年もしたらすべてま

かせられますよ」と太鼓判です。靖政さんが力を入れていきたいのはワツペン。趣味のサークル、企業チーム、学校関係。街のプリント店もあります。が、「ワツペンや刺繍の方が色落ちせず長持ち。何より立体感があつて光の反射で見え方が変わって面白い」という持論。若い人に敷居が高いと思われている刺繍を身近なものにしていきたいともいい、早く仕事を軌道に乗せて福島の家族を呼び寄せたいとがんばっています。

ミシンは単頭機と一度に何枚も縫える多頭機がある。データを入力すれば自動的に縫い上がっていく

## 道具で道草30年 坂一敬

レトロスペース坂会館館長  
(坂栄養食品開発部長)

昨年暮れ、その画家の戸田吉三郎さんに電話をした。「来年は何としてでも会いましょう」。今年になって戸田さんより、お正月に撮った本人の写真が送られてきた。もう二十年近く会っていないのだから、会ってもわからないかもしれない。私も最近撮った写真を送った。

朝食の後、海を見に行った。目の前に島みたいな岩が連なり、それが防波堤の役目をして静かな渚になっている。記憶が五十年前に遡っていく。当時、千葉の内房は

## 理想郷で老画家と。(続き)

アクアラインを越え木更津まで行き、ここで内房線に乗り換えて保田まで向かった。駅に降りると白髪の今年で八十五歳になる戸田さんがいた。再会を祝して番屋という店に入った。受付の女性が「先生いらっしやい」と声をあげ、程なくオーナーの奥さんがわれわれの席に挨拶に来た。戸田さんはここでは名士。そして、食べた生寿司はものすごく美味しかった。



画伯(左)と一番屋での再会

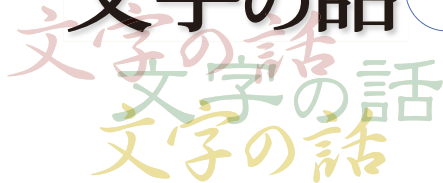
夜、暗い夜道を戸田さんの運送する軽トラでアトリエに向かった。絵を運ぶのにはこれが一番という。室には薪ストーブがデーンと置いてあり、薪は庭の木を使っているとか。コックをひねると湯沸かし器も無いのに熱い湯が出た。とてもなめらか。太陽光で水をお湯にしている由。

工業開発が進み、海岸は埋め立てられ、海は汚れていく中で最後まで残って理想郷といわれた場所があった。

朝、家の周りを二人で散歩した。敷地は何と三千坪、薪が自家生産可能なのもわかる広さ。野生の猿が家に入ってきたこともあるとい

そうだ、ここだったのだ。私が今立っているところがその理想郷といわれた所なのだ。目をつぶり思いは若き日に帰っていく。砂浜で貝のかけらを拾い、砂をはらってポケットに入れた。別れる時、戸田さんはホームに立ちつくして私を送ってくれた。

## 文字の話 ① どうしてこれが『そば』なのか？



### 街で探そう、変体仮名!!

仮名の種類を挙げよといわれて4つ答えられれば正解です。登場順に万葉集の表記に代表される万葉仮名、続いて平仮名、片仮名ときて、もう一つが明治になってできた変体仮名。変体仮名？ 名称は知らなくても街でよく見かける字ですよ。



北海道開拓の村の旧三河本そば店の看板  
きそばの「き」は「生」でなく「巖」を崩してある

おそらく最もよく目にしていると思われる変体仮名が、そば屋の看板やのれん。字は読めなくても自然に「きそば」と読んでいます(写真)。これが実は「き」は「巖」、「そ」は「楚」を崩した字、「ば」も「者」を崩して濁点を打つてあるといえぱびっくりです(「き」を「生」としてあるところも多くみられます)。

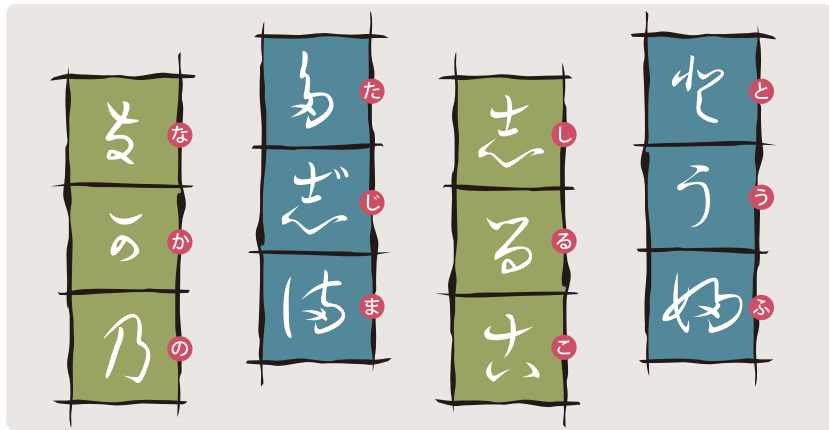
どうしてこんなことになったのかというと、ここに変体仮名の長い歴史があるのです。明治になって新しい教育制度がしかれて読み書きが浸透するようになりましたが、仮名には一つだけでなく複数

の字体がありました。例えば「あ」という一つの音には安、阿、愛といった漢字表記が用いられていました。「い」には以、伊、移、意といった具合です。

しかしこれでは、読む側にしてみればまったく不便と言わざるを得ません。ましてそれらが草書のように崩し字になっているのは判読にも苦しんだことでしょう。そこで明治33年(1900)の小学校令施行規則改正が、平仮名表記に用いる字体を一音一字と定め、「う」は「う」、

「え」は「え」と表記するように定めたのです。この改正以降、平仮名表記の統一が進み、学校教育では用いられなくなった仮名を変体仮名と呼んで、平仮名と区別するようになりました。

今日、変体仮名に出会うのは店の看板が多いようです。そば屋のほか和食や和菓子、旅館、飲食店など伝統的な業種に見られます。崩してあってには判読しにくいものは、変体仮名を疑った方がよいかもしれません。



歴史を重ねていくうちに、人が変

#### ●記念誌で歴史を残す

お気軽に申し込みください。

#### ●出前でアドバイスを

自分史など本をつくりたいと考えている人のために、印刷担当者と編集者がお伺いしてアドバイスをいたします。グループでもどうぞ。

#### ●小紙をお送りします

忙しい毎日、ほっと一息つける話題を提供していきたいと願っている小紙です。ご希望の方に無料でお送りいたします。印刷紙工までお申し込みください。



#### 本づくり質問箱

本づくりの「？」にお答えします。お気軽に質問をお寄せください。



Q ものを書く習慣はほとんどないのですが、何か本を出して、子供たちに残しておきたいと考えようになりました。新しいことに挑戦する意欲はまだありますので、できることから始めていきたいと思っています。本づくりへ向けて何から始めたらよいでしょうか。

#### 書く習慣を日記から始めよう

A 書くよりも(ボタンを)押すことが多くなった時代です。書く習慣の手始めに、まず日記というのはどうでしょうか。単純に、今日あったことを記すだけなのですが、ペンを持って日記に向かった瞬間に、考えをまとめるという行為も同時に始まることにお気づきでしょう。単年でなく、

複数年の日記なら昨年や一昨年の出来事が思い出され、また比較もできて面白いものです。日記でなく家計簿でもよいのです。その日使ったお金の中身と、朝夕の食事のメニューを書いておくだけで、ひょっとしたら家族の健康状態や財政状況? も読み取れるかもしれません。



こうやって残しておいたものを後に読むときに一緒に思い出されること、それに伴う感慨が大切に、本当は本でなくてもよいのかもしれない。

でも一年一冊を数十年に一緒にまとめるのは大変です。そこで選りすぐりだけを本にしましょうというのが、例えば自分史のはずです。日頃の書く習慣、書き残しておこうという気持ちがいずれ形になるということです。